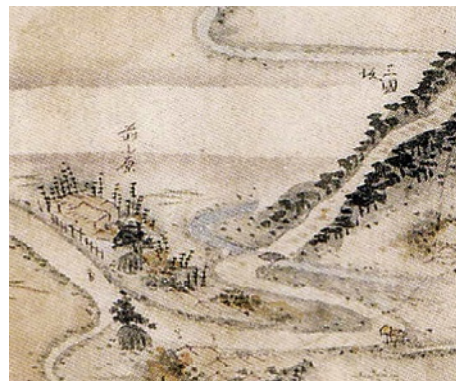


5. 木山口町にみる歴史的風致

(1) はじめに

佐賀県の最も東端にあり、福岡県と接する本町は、江戸時代には肥前一筑前一筑後の三国が交わる地として国境に接する場所であった。現在の本町の町場を形成する場所は、江戸時代より木山口町と呼ばれ、長崎と小倉を結び、山陽道、東海道と江戸へ向かう物流の中心的道路であった長崎街道が南北に縦断している。本町の中心的商業地として栄えた木山口町には、本町に住む人々のみならず、長崎街道を行き来する人々へむけた様々な業種が営まれ、現在も江戸時代からの町場の風情をほのかに感じることができる。国道3号やJR 鹿児島本線がつけられ尽きることのない物流・人の流れは、交通至便な場に生まれた木山口町の姿を今に伝えている。



資料 田嶋外伝浜千鳥に描かれた「三国坂」
(安政5年(1858) 筑紫野市教委蔵)

木山口町は、長崎街道の宿場である筑前原田宿と対馬田代宿の間宿として正保2年(1645)に新しく成立して栄え、人々の往来の姿や家々の数が紀行文などにも記され、当時の木山口町の佇まいを知ることができる。国境に接する町として木山口町の北2.3km程のところに国境標石が今も残り、現在は県境・市町境として、その働きを続けている。

この肥前一筑前一筑後の三国が境する地は、「三国峠」「三国坂」として呼称され、その姿も見る側によって異なっている。互いに干渉しない、口に出さないという意味として「クチナシ」の木が国境線に植えられていた。また、多くの人々が行き交う街道でありながら、人寂しい場所として三国境は人々に知られていたことが、江戸時代に描かれた『田嶋外伝浜千鳥』に記されている。

木山口町は、元禄絵図の記載によれば、江戸時代の正保2年(1645)に長崎街道沿いに成立した町で、十日恵比須祭が行われる若宮八幡神社もこの町の鎮守として、承応3年(1654)に創建された。また、本町は、長崎街道という江戸時代の物流、情報が行き交う場所であったが、町域を流れる数本の川によって分断され、降雨時の増水の際に投宿する者たちのために宿が建ち、間宿としても栄えていく。投宿者のための飲食も必需品化し、江戸時代には1軒の造酒屋が操業を始める。その後大正年間に創業した酒造場は現在も操業している。さらに、18世紀中頃に遡る製薬・売薬業である田代売薬が発生し、物流のための卸問屋業も盛んとなるなど、その面影を今に伝える建造物が長崎街道沿いに残されている。

(2) 木山口町にみる歴史的風致

木山口町にみる歴史的風致は、下表のように示される。

	建造物と町並み	営み
木山口町にみる歴史的風致	●木山口町に関わる建造物と町並み ・木山口町に関わる建造物 (長崎街道・国道 等) ・長崎街道と木山口町の町並み	●製薬・売薬 ●間宿の生業・造り酒屋と市 ●若宮八幡神社の十日恵比須祭

①木山口町に関わる建造物と町並み

ア) 木山口町に関わる建造物

【長崎街道・国道】

長崎街道は、江戸時代初期の慶長年間に長崎と豊前小倉を結ぶ主要道路として整備される。この長崎街道を通して国内の文物のみならず、欧州からの文物が人とともに行き交い、多様な文化に接する道路として重要な役割を担っていた。近代に入り明治9年(1876)には、太政官達によって東京市(現在の東京日本橋)～長崎港までを1等道路とし、明治18年(1885)には同路線を国道4号に、また鳥栖市田代宿より分岐し熊本鎮台へ至る道路を国道11号としている。明治9年(1876)に記された『基肄郡誌』には、一等道路を「東京街道」と記載し、道路に架橋されている鎌割橋について、その来歴と構造を「石造」と記している。その後、長崎街道に近接して明治20年(1887)には、現在の国道3号の原型となる国道4号が開削されたことが、『梁井幾太郎の生涯』や、六区々有文書に記され、徒歩による道路から大量輸送の軍用道路としての体を整えてくる。さらに、大正9年(1920)には新たな道路法が施行され、東京から鹿児島県庁所在地までを国道2号に、鳥栖市桜町から分岐し長崎までを国道25号に改称する。この大正9年に施行された道路は、「主トシテ軍事ノ目的ヲ有スル路線」としている。昭和27年(1952)に道路法が改正され、国道2号を国道3号に、国道25号が国道34号に改称され現在に至っている。

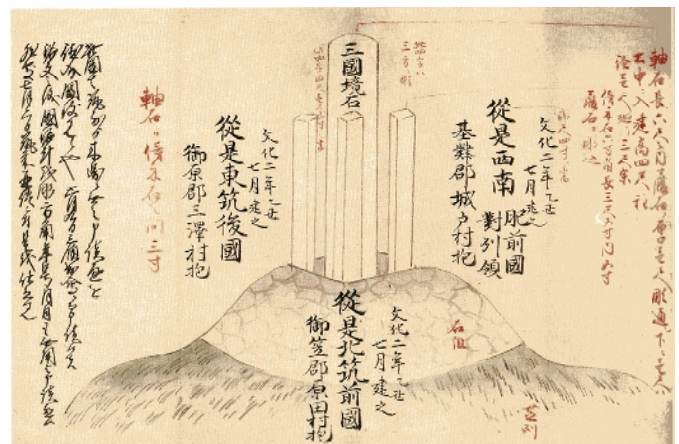
なお、明治20年に開削された国道4号・国道2号(現 国道3号)が、平成11年(1999)の国道3号拡幅工事後も側道として、その姿を今に伝えている。

【国境石】

現在の国道3号を北上していくと、「三國境」と書かれた道路案内標記が目に入る。ちょうどこの西側に、木々に囲まれた石碑があり、これが二国境石である。本町が属していた肥前国と、隣国の筑前国の境界を示すものである。また、二国境石から長崎街道を挟んだ反対の丘陵には、肥前国・筑前国・筑後国の国境を示す「三國境石」がある。これらの国境石が示すように本町は旧国境の町であり、現在も佐賀県と福岡県の県境の町として交通の至便な地として、JR 鹿児島本線、九州縦貫自動車道、国道3号など主要交通網が通っている。

これら国境石は、文化2年(1805)に作成された枯れ松国境争論を記した『御境石建覚書書』に詳しく見ることができる。文化初年に二国境に植えられていた松が枯れたことに端を発し、国境

争論に発展する。肥前国側に属する城戸村の庄屋(梁井)徳介と筑前側に属する原田村の庄屋(山内)奎七とで調整を図られたが、国境の両庄屋だけで解決できる問題ではなかった。そこで、城戸村庄屋の梁井家が、この二国境についての争論を一旦棚上げにし、もう一つの課題であった三國境を画する



資料 三國境石(梁井家文書) 文化2年



写真 三國境石(現況)



写真 二国境石(現況)

問題を持ち出す。三国とは、肥前、筑前に筑後を加えた三国で、隣接する小郡村の庄屋（花田）卯八を加えて三者での議論が始まる。ほどなく決着を見ることとなり、その後、仲裁者としての肥前国姫方村庄屋定右衛門を入れた協議によって二国境の問題を解決したという。これら一連のいきさつは文書、絵画資料として残り、建造物として二国境石、三国境石が現存していることから、これらの記録が記された文化2年(1805)に起きたもので間違いないと思われる。



資料 枯松跡地分割図(二国境石絵図)(梁井家文書)文化2年(1789)一部加工

二国境石は国道3号拡幅によって移設されたが、現位置(国道3号の下)に2ヶ所の傍示石と中央の標石の基礎が保存され、中央標石の現物と2ヶ所の傍示石のレプリカは、国道3号横の小公園に移設されている。ただし、2ヶ所の傍示石と中央の標石は本来2本の石柱が背中合せのラインが一直線となって境界を示していたが、移設の際にゆがめられて設置されたために完全な移設とはなっていない。本来国境線を表現するはずの二石合わせ目線が移設時に^{がんこう}雁行しており、国境線を表現できない状況となっている。

三国境石は、現在の県境、市町境と重なり長崎街道東部の丘陵頂部に現存している。文化2年(1805)に描かれた三国境石の絵図では、四角柱3本によって囲繞されているが、現在は四角柱全てが失われている。この丘陵上には、この三国境石と結ぶことで国境線を示す傍示石も残されている。

【三国煉瓦アーチ橋】

三国煉瓦アーチ橋は、本町と筑紫野市の境、三国境に所在する。明治22年(1889)に九州鉄道によって架橋された赤煉瓦造りのアーチ橋で、煉瓦造りのアーチ橋として国の登録有形文化財に登録されている筑紫野市永岡にある三連アーチ橋と同年に博多から千歳川仮停車場(現 鳥栖市)まで開通していることから、同時期施工とされている。架橋は、ドイツ人技師ヘルマン・ルムシュッテルの指導のもと造られ、橋基礎ならびに外装はイギリス積が、アーチ部分は長手積が用いられ近代建造物の優美な姿を今も留めている。



写真 三国煉瓦アーチ橋

【天本家住宅】

「^{ながら}長良屋」という屋号で呼ばれている天本家住宅は、本町の長崎街道沿いの白坂集落にあり、田代売薬の商家としては最も古い例として挙げられている歴史的建造物である。土蔵柱材に弘化3年(1846)の墨書があり、主屋もその建築構造から同時期に建てられたものと見られている。天明7年(1787)に対馬藩より認められ、「法奇応丸」という薬の看板を許されている。主屋は、長崎街道に南面して建ち、屋根は入母屋造、瓦葺である。間取を復原すると、一番奥を納戸とし、この右手に仏壇と床を構えた表座敷と、床・棚・書院を備えた奥座敷が設けられている。奥座敷の前は塀で囲み、正面に門(古図では中門)を構え、背後には塀で囲った庭があり、かなりの格式をもった家であったことが分かる。



写真 天本家住宅

【西海製薬社屋】

西海製薬は、大正4年(1915)11月に天本龍之助ほか5名を発起人として西海製剤合資会社として設立された。その社屋は、長崎街道沿いの木山口町の北の入り口にほど近い、若宮八幡宮南側に所在している。現社屋は、昭和29年(1954)に改築され、木造2階建ての社屋は、本町における近代洋風建築として貴重な存在である。



資料 西海製薬社屋 (昭和29年)



写真 西海製薬社屋(現況)

【松隈酒造場主屋】

松隈酒造場は、現在のJR基山駅前通りと長崎街道が交わる本町でも多くの人々が行き交う場所にあり、その主屋は明治中期に建築された入母屋造りである。『基山町史資料編』によると、大正10年(1921)頃に草葺きから瓦葺きとなり、妻入り木造二階建てとして現存している。松隈酒造場として背後には造酒屋の蔵があったが、一棟を残し多くは失われ、主屋のみが盛んに行われていた造酒屋の風情を残している。



写真 松隈酒造場

【基山商店】

実松川沿いに建つ基山商店は、松隈酒造場と並ぶ造酒屋として知られ、松隈酒造場が操業を止めた今となつては、間宿の面影を残す本町唯一の酒造場・基山商店として営業を継続している。

○主屋

主家は、長崎街道と交わる実松川に面して建ち、棟墨書から昭和15年(1940)建築とされ、入母屋造り瓦葺きで平入り木造二階建ての建造物である。



写真 基山商店主屋

○精米所

酒造りの原点である米を研ぐ前の精米作業が行われる場所である精米所は、主屋の南側、元禄絵図にも描かれている道を挟んで位置し、精米所も棟墨書から昭和9年(1934)の建築とされる。入り妻造り棧瓦葺きで、南北に二間の下屋を持つ。平入木造二階建ての建造物である。外観上一階建てに見えるが、内部構造上は二階となっている。



写真 基山商店 精米所

○酒造蔵・仕込蔵

酒造蔵は、主屋西側、長崎街道からは主屋背後に酒造蔵が建ち並び、敷地の最も北側に入母屋造り棧瓦葺きで、平入二階建ての酒造蔵がある。屋根小屋組みにトラス構造を有し、『基山町史 資料編』では大正末期から昭和初期の建築とされている。酒造蔵の南に昭和34年(1959)建築とされるRC造の仕込蔵が建つ。この仕込蔵で年末に仕込まれた酒が、毎年2月には新酒の出来をみる新酒会が行われ、町内外から多くの人々が訪れている。



写真 基山商店 酒造蔵

【中村家住宅】

長崎街道沿いに建つ中村家住宅は、商家として建てられ、所有者への聞き取りによると大正前期の建築とされる入母屋造り棧瓦葺き、平入り木造二階建ての建造物で、接待のために設けられた二階広間の横には、大正期の建築としては町内でも珍しく2階にもトイレを設けている。長崎街道沿いの主家に対し、背後には住人の生活空間としての建造物や、住まいに接して蔵が建てられるなど、利便性の高い部屋配置となっている。また、商家には珍しい冷蔵庫も備えており、交通至便な本町の商いを担った中村家の姿を偲ぶことができる。



写真 基山商店 仕込蔵

【若宮八幡神社】

若宮八幡神社は、承応3年(1654)に創建され、御祭神はおほさざきのみこと大鷦鷯尊(仁徳天皇)で、あまてらすおおみかみ天照大神とすさのおのみこと素戔嗚尊が合祀されている。毎月、氏子である3区、8区、9区の町民によって当番制で境内地、社殿清掃が早朝より行われ、清浄さが保たれている。若宮八幡神社がある千塔山丘陵東部には、特別史跡基肆城跡と関連する関屋土塁基部が残されており、境内は丘陵と土塁基部の両者の上に位置している。

この神社は、木山口町の北側出入り口の位置にあり、長崎街道沿いに明和4年(1767)の石製鳥居、その横に文化15年(1818)寄進の道しるべの神である猿田彦大神碑が建ち、千塔山丘陵上に建つ社殿まで、長い階段を登る。階段を登ると右手に明治時代建築の神殿、拝殿が、かつて大宰府の南の関であった関屋土塁の西側に建っている。現在は神社の森に覆われているが、昭和前期撮影の写真からは、丘陵上に建つ社殿を見ることができ、北の三国坂(峠)を越えた旅人や、南は田代宿を出立した人々へのランドマークとして機能していた。

境内地内には、神殿、拝殿のほか、西側に観音堂、恵比須神が祀られ、南西側には木山口町の商



写真 中村家住宅

業発展に尽力した
松隈来造氏の昭和
37年(1962)建造の
顕彰碑がある。

○恵比須神社

境内の西側の奥
に観音堂、そして
観音堂の西隣に文
化14年(1817)造
の石製神殿の恵比
須神社がある。

○観音堂

神殿、拝殿と恵
比須神に挟まれる
ように観音堂が建っ
ている。宝暦4年
(1754)建築で、後
年に寄棟造りの屋
根を切妻造りに、扉がある南
面全面、残りの三面の腰壁部
分がコンクリート製に改修され
ているものの、残された部分
を見ると宝暦期の小屋組をそ
のまま利用している。堂舎内
に、仏壇が備えられ、観世音
菩薩が祀られている。神社境
内地に仏神両方が祀られ、明
治初期の神仏分離の意思浸透
の度合いを知ることができる。

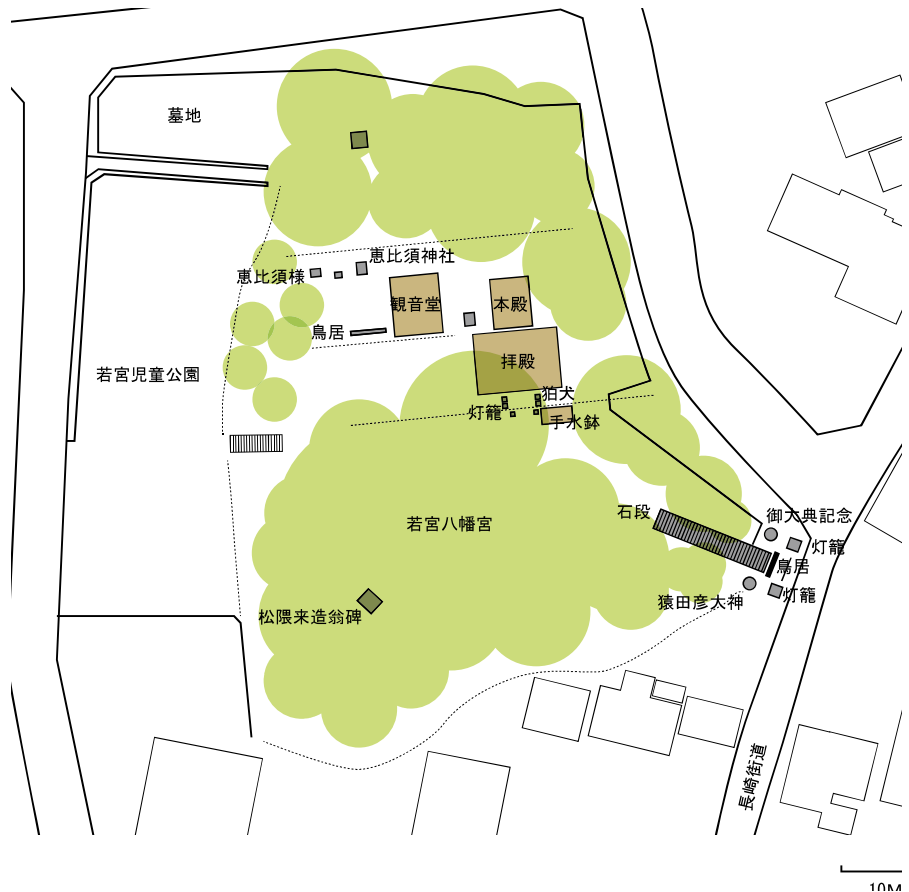


図 若宮八幡神社境内図



写真 長崎街道から境内への入口



写真 境内の全景



写真 拝殿



写真 恵比須様



写真 恵比須神社



写真 観音堂

イ) 長崎街道と木山口町の町並み

長崎街道は、江戸時代の主要道路として機能し、本町は北の原田宿(現 福岡県筑紫野市原田)、南の田代宿(現 佐賀県鳥栖市田代)の間に位置している。町域の東部を南北に縦断する長崎街道は、明治20年(1887)から明治22年(1889)に開削された旧国道4号(現国道3号)、旧九州鉄道(現 JR 九州鹿児島線)によって失われた箇所もあるが町域全体でみると多くを残している。また、近代に施工された旧国道4号ならびに旧九州鉄道の文化遺産も、現国道3号の側道ならびに JR 九州鹿児島線の三国煉瓦アーチ橋として現在も使われているなど、近世・近代の交通史の文化遺産を現代の街並みの一部として見ることができる。



写真 長崎街道と木山口の町並み

長崎街道のかつての姿を知る手がかりは、行政区6区が保有する文書に地籍図として残されており、国境石から南へ丘陵裾部を南進し、現 JR けやき台駅東方で、関屋川を渡り、現在の国道3号ならびに JR 鹿児島本線に重なるように南進し、白坂丘陵北部で西に曲がることが見てとれる。関屋川を渡る場所には、江戸時代に「お伊勢参り」を密かに行きお咎めを受けた鎌浦の人々への刑罰として架橋工事をさせて造らせた「鎌割橋」と呼ばれる橋が架けられていた。

この鎌割橋から南進し、白坂の丘陵へ直角に西曲する箇所は、現在は通行止めになっているが、道幅2m弱を測り、江戸期の長崎街道の面影を留める貴重な場所となっている。ここから南へ湾曲しつつ曲がり、白坂の集落へと入っていく。車一台がやっと通れる道幅の両側に家が建ち並び、参勤交代の殿様が腰をかけて休憩したと言い伝わる石を庭に有する旧家や、人力車が止められていた「立て場」の地名も、この集落に残る。さらに進むと、大きな猿田彦大神、庚申尊天石碑が建つ荻又道との分かれに至り、白坂集落の平坦な街中へと入る。ここには「長良屋」という屋号の古い家屋(天本家住宅)が残り、また白坂の鎮守である天満神社やその幟旗を立てるための石柱が立ち、街道の趣きを感じることができる。その次には城戸・丸林集落から東進してくる道と合流しつつ、現基山登山口踏切へと曲折する。踏切を東へ渡るとすぐに南へ曲り、木山口町の入口へと至る。この区間は、道幅、周辺景観としての水田が残り、数年前までは、長崎街道の面影を留める箇所であった。街道を横切る高原川を渡る箇所には石橋として下桜町石橋が残され近代の面影を留めていたが、河川改修工事によって架け替えられている。ここから木山口町の入口にある国道3号上町交差点までの街道は、国道3号の拡幅によって失われている。さらに南西に進むと、木山口町の鎮守である若宮八幡神社の石段に至る。この石段の前から間宿としての木山口町の町並みが続く。配置売薬で知られる昭和29年(1954)建築の西海製薬社屋、松隈酒造場の主屋であった明治中期建築の松隈家住宅、さらに南進すると卸業を営んでいた中村家住宅が並び、旧街道の繁栄をうかがわせる。

現在は県道小倉小松線によって分断されているが、そのまま南進して街道がつづき、実松川と接する箇所で、本町のもう一つの造り酒屋である基山商店を営む小森家住宅の建造物が見えてくる。この街道沿いに面する基山商店の建造物は、昭和15年(1940)建築と伝えられ、新酒ができたことを知らせる杉玉をぶら下げた木造の主屋と蔵や倉庫が並び、近代の長崎街道の風情を今に伝えている。実松川と秋光川が合流する箇所の手前で川を渡り、さらに秋光川を越え、県道白坂久保田線に重なるように直線で南進し鳥栖市今町へと続いていく。

本町では、近世において長崎街道が、近代に入ると国道や九州鉄道が通り、一貫して主要交通路としての役割を担っており、現在も九州の主要な交通動線が通る町として社会的位置を確立している。明治40年(1907)の鉄道国有法後に国鉄となった鹿児島線上に大正10年(1921)には基山駅が開業し近代産業の一角を担う製糸業が、昭和14年(1939)には甘木線開通による太刀洗飛行場への物流拠点として軍事産業である火薬工場などが本町に築かれていく。

戦後には、これらの工場は住宅地へと変わっていき、これまで培われた交通網は、人と物の運搬手段と

して機能し、1日平均約 200 本の電車が基山駅に停車、1日平均約 30,000 台の車両が国道 3 号を通じて基山町の中を通っている。特に基山町内の国道 3 号沿いには、九州における東西南北の交通の結節点を物語るように、大型車両向けの駐車場を完備した店舗が集中し、中には 50 年以上の歴史を保ちつつ営業を継続する飲食店など、連日多くの人々で賑わっている店舗もある。

時の流れの中で長崎街道は、文物・人の流れを運ぶ役割を国道・鉄道に置換していくが、旧集落の昔ながらの風情とともに残り、時折見かける長崎街道を歩く来訪者の姿は、その存在を住民の記憶に覚醒させ、その命脈を保ち続けている。



写真 長崎街道と若宮八幡神社の境内



写真 木山口町の町並みから見える
若宮八幡神社の社叢



図 木山口町に関わる文化遺産

②製薬・売薬

木山口町をはじめとした鳥栖市東部までの旧対馬藩田代領には、江戸時代から交通の利便性と対馬藩田代領という知名度を利用して、製薬、売薬業が発達していく。

木山口町にも昭和 10 年 (1935) 建築といわれる木造二階建て建造物を社屋とする西海製薬などの会社が今も営業を続けている。

また、製薬と並んで、富山などの配置売薬と並ぶほど盛んに配置売薬業が行われてきた。本町の配置売薬業は、国境石を頻繁に通過する広域な商圈を誇り、現在も盛んに行われている。

【田代売薬の歴史】

本町で培われた配置売薬は、江戸時代の対馬藩領であった基肄養父郡内の木山口 (現基山町)、田代 (現鳥栖市田代) を中心として発展した田代売薬の流れをくむ。

日本四大売薬の一つに数えられる「田代売薬」は、現在の町域と鳥栖市の一部を含む、旧対馬藩田代領においては始まり、今日でも町内には、西海製薬、佐賀製薬、平安堂などの製薬会社が営業を続けている。

田代売薬のはじまりの時期については、判然としないが、『博多津要録』(櫛田神社蔵)の宝暦 4 (1754) 年 11 月の項の

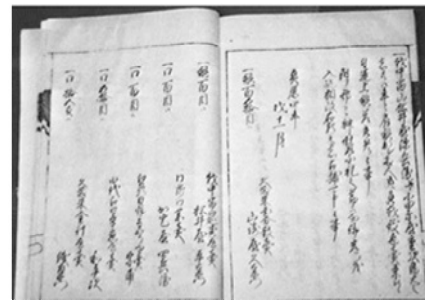
なかに、「田代江口奇応丸売の和平次」と記事が見られ、田代に奇応丸という薬を売る売人である和平次という人物がいたことがわかる。続けて、同資料のなかには、宝暦 7 年 (1757)、宝暦 11 年 (1761)、宝暦 12 年 (1762) に、「売薬差し止め」の記事もみられる。発達史的にみれば、このような差し止めの通達を出さざるを得ないほど、宝暦期には田代売薬は発達していたといえる。

家人と売薬人の会話は、他愛のない世間話が繰り返されるが、会話の中から近所の情報や世の中の動きを相互に伺い知ることができ、情報過多の世の中で、世間話ではあるが貴重な情報源となっている。かつて江戸時代には、長崎街道を行き来し多くの売薬人が九州各地へ出向き販路を広げていった。

【売薬の販路と長崎街道】

田代売薬人の商売域は、九州を中心に広域に及ぶものであった。この背景には、田代領域内に人・物・情報等が多く行き交う長崎街道が通っていることが要因の一つであるとされる。田代売薬人は、このような交通・地理的好条件をいかし、薬材の仕入れや合薬の配置販売を有利に働かせていく。早くから他領にも進出しており、柳川領に宝暦年間 (1751 ~ 1763)、久留米領に明和年間 (1784 ~ 1771)、熊本領に安永年間 (1772 ~ 1780) という記録が、安永 10 年 (1781) に記された『大福日記帳 (桜井家文書)』にみることができる。明治時代になると、汽車や乗合自動車などの交通機関が発達したことにより販売域は爆発的に広がっていく。いろいろな地域で見聞きしてきた売薬人の世間話から世の中の情報をつかむ力は、近世にあっても貴重な情報源となっていた。

明治時代になると、長崎街道は国道 2 号へと名称が変更され、そして明治 20 年 (1887) から明治 22 年 (1889) には現在の国道 3 号の原型ともいえる軍用道路としての



資料 『博多津要録』にみえる田代売薬
江戸前期 櫛田神社蔵



資料 置き薬の効能を伝える新聞記事

国道4号へと広がる。同じく明治22年(1889)には、当時の面影を三国煉瓦アーチ橋が今に伝える九州鉄道が開通し、九州の主要交通網が整備され、汽車や乗合自動車などの交通機関が発達したことにより販売域は爆発的に広がっていく。

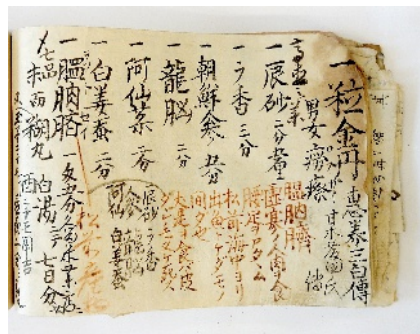
薬が入るパッケージは、昭和前期を思わせるレトロなもので、その薬効による普及もさることながら、変わることもないパッケージデザインの浸透度によって、何の薬なのかが人々の記憶に深く刻まれている。さらに製薬技術は、江戸時代から変化しつつも、昭和前期まで町域で引き継がれ、製薬に関わる家々で手作りされていた。田代売薬の主力商品であった「朝鮮奇応丸」によると、文化十年に記録された『文化十年 当時調合方』には、下記の薬種が使われていたことが読み取れる。

一、人参(朝鮮人参の根)	一両
一、沈香(インド産ジンチョウゲ科植物の樹脂に富む木部)	一両
一、熊胆(熊の胆のうを干したもの)	壹匁五分
一、麝香(ジャコウジカの麝囊の内容物)	一匁
一、焼金箔	三十枚

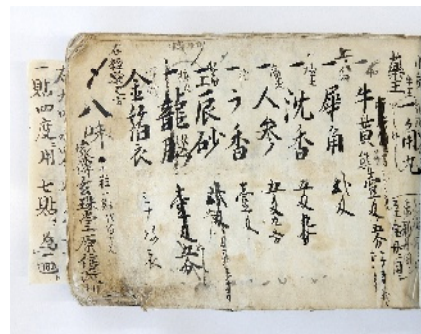
他の文書から確認すると、入れられる分量が製薬会社によって異なっているものの、おおむね四味と焼金箔をもって作られている。この朝鮮奇応丸のほか、^{ちようせん こたんがん}朝鮮虎胆丸、^{ごかんやく}五疳薬をはじめ33種から52種の薬を入れ薬として常備し、顧客の要求に応じていた。

【薬作りと製薬会社】

江戸期の中で操業をはじめた田代売薬は、対馬藩領基肄養父で作られていた。その製法には、多くの地域の人々からの聞き取り情報が取得され、その様々な情報を総合化し効能を高めつつ作られていたことが、文化14年(1817)の『諸薬方記』や嘉永3年(1850)の『七宝秘薬書』をはじめ多くの書物に見ることができる。遠くは大阪や日向(宮崎)の人々から、近くは宰府(太宰府)の人からの聞き取りがなされ、様々な人々と信頼関係のもとでつながり、そこから得られた処方によって田代売薬の



資料 『諸薬方記』 文化14年(1817)
基山町教育委員会蔵



資料 『七宝秘薬書』 嘉永3年(1850)
基山町教育委員会蔵

置薬として出回る薬が調合されていく。

生薬でつくられる薬は、現代の化学薬品とは異なり、保存が効くうえ効能が低下しないという利点があった。現代では「使用期限」が記されているが、かつては長く保存され使われていた。

近代に入ると、明治24年(1891)に梁井幾太郎氏が薬種を扱う梁井商店を立ち上げ、久留米、若松、博多、熊本と販路を広げ、鉄道の開通も加わり大阪からの仕入れも行っていた。近世から引き継がれてきた家内工業による製薬業が、家庭を離れ製薬会社の工場へと移り、徐々に近代化の波にのまれていく。

大正3年(1914)3月には、売薬や販売に関わる売薬法が公布され、無資格者による売薬業を営む者について一代限りの制約下による営業を認めたが、薬剤師、医師でなければ販売することができないこととなり、田代売薬の再編が余儀なくされる事態となる。これを受け大正4年(1915)11月に天

本龍之助ほか5名が発起人となり西海製剤合資会社が設立され、家庭内生産から工場制での生産へと移行し、家庭で家族を作業人として手作りされていた薬も、工場内での統一的な多量生産へと移行していく。生産家庭による個別処方による薬づくりから、衛生管理のもと統一的な薬づくりへと移



資料 手作業による工場生産の様子 左：成分確認の様子 中：錠剤製作の様子 右：錠剤取り上げの様子

行することで、効用にムラが無く均一的な薬生産が可能となっていく。併せて品質管理が行われることで、消費者への安心も売ることができるようになっている。

【薬売り人】

薬売り人(以下、「売薬人」とする)は、本町では町域全域に在住し、江戸期には多くの家々で製薬業も兼業していた。明治に入り、「薬品営業並びに薬品取扱規則(明治22年(1889))」が施行されると資格保有者や登録業者に限定され、廃業者が出てくるが、資格を取得するか製薬会社へ帰属することで売薬業を継続した人々もある。

明治期の記録には、奈良田や長野、また基山^{きざん}の麓の丸林・城戸をはじめ町域全域にまだ売薬を行う人々が残っていた。現在でも、数は限られてきているが町域で配置売薬に携わっておられる方がいる。

売薬人の家々には、製薬業を営^{やな}いでいた時の道具が今も伝えられるとともに、配置売薬で家々を回る際の柳行李^{やなぎこおり}が伝えられている。水に浸すと加工しやすく、乾くと固くなり、吸湿性に富むコリヤナギを材料として作られていることから、その名を柳行李と呼ぶ。湿気を嫌う薬を運ぶのに適した入れ物として用いられていた。

現在の売薬人の人々の先代までは、荷運び自転車や二輪駆動車で移動しており、今では、重さ約10kg内外であろうか、特別注文のショルダーケースの中に木製の仕切り箱で薬箱をつくり、二段重ねにして持ち運びし、乗用車にて運搬している。駐車空間が限られている中村家住宅や天本家住宅が建つ長崎街道などの旧道沿いの家々には、適所に乗用車を止め、徒歩にて家々をまわる。

町内の多くの家々には今も配置売薬が置かれており、売薬人が町内を回る姿と、玄関先で売薬人と家人とが会話する光景は、話題に変化こそあれその風情は今も昔もあまり変わっていない。

「置き薬の入れ替えにきました。」という挨拶とともに、半年に一度、配置売薬会社の薬売りの担当者(以下、「売薬人」)が各家庭にやってくる。売薬人は、玄関先に腰をおろし、家人が持ってくる置き薬の箱を待つ。待つ間、持参してきた大きなトランク状のショルダーバッグを開き、きれいに並べられた多種多様な



資料 売薬人の姿(大正期)



写真 中村家住宅がある長崎街道を歩いて回る売薬人



写真 置き薬入れ替えの様子

薬から、その家庭に納めているものを揃えていく。そうしている間に、家人が置き薬の箱を玄関先まで持ってきて、「今回は、皆、腹痛で、腹痛薬が売れちゃった。」と、その時々把事情を売薬人に訴える。春先は、冬の間に消費した風邪薬が、梅雨時は、腹痛薬がなくなり、力仕事がかさむ家庭では、湿布薬が無くなったと各家庭の事情で、入れ替える薬の内容が変わっていく。そこここに対応するのも置き薬を売る売薬人の能力でもある。

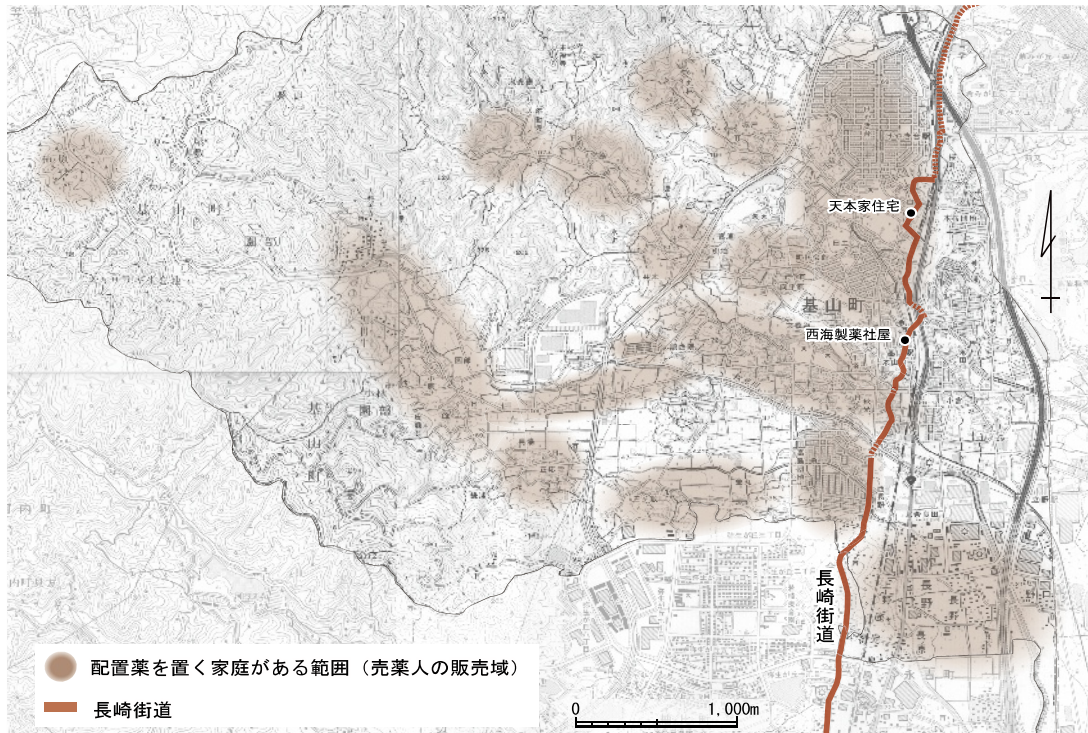


図 町内の販売域

【薬と売薬人への信頼】

本町を販域としてまわる売薬人は、祖父、父、自分と代々続けられてきた配置売薬を引き継いだ者と製薬会社の社員のふたつに分かれる。代々続く配置売薬の流れにのってまわる者は、個別に資格を有し、先代から継承する「お得意様」を受け継ぎ、配置薬の入れ替えに年2回ほど家々を回っていく。

この代々続く売薬人は、会社の株を所有し、個人営業として自ら薬を仕入れ売っていく。自らの稼ぎを自らつくるという自転車操業的営業形態であるが、長く務める売薬人は、「むかしは良く売れました。一種の『信心・信仰』のように、『この薬じゃなきゃダメだ。』と言われるお客さんが多かった。今もその姿は変わりませんが、薬店が広まったおかげで、配置売薬を置いてくれる家が少なくなりました。」と話す。一種の「信心・信仰」的な薬利用という、成分は同じでもパッケージが異なるだけで薬効が違って感じるということに、迷信めいたものを覚える。海外旅行をするときの常備薬として「この赤玉じゃないといかん。」「このツートンじゃないといかん。」と感じたりするのも、配置薬を長年利用し、効果を感じてきた人でなければ想像できないことでもある。

同じ会社内で同一地域を回ってはいけないという暗黙の「掟」もある。会社の効率としてみた時、同一の家を回ることの効率の低さは自ずと理解できる。

また、個々人の「絶対的」効能薬を必要とする家には、家族ごとに最大で8箱もの配置薬をタンスの上にズラリと並べて置くところもあり、排他性とは程遠い配置売薬の姿を見ることができる。

薬のみならず、売薬人本人が集落全体から絶大なる信頼を得ることもある。「現在、配置売薬の□□さんが、〇〇さん宅にお見えです。」という地区内アナウンスが流され、田畑に出ている者たちが急ぎ家に帰り、売薬人がやってくるのを待ちわびるという集落もある。

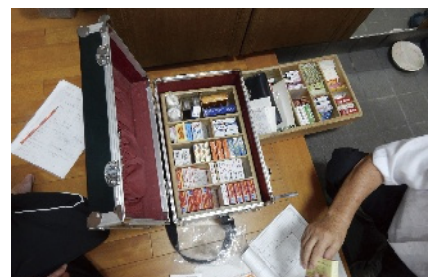


写真 売薬人のショルダーバッグ

一方、売薬人と各家々の人々との会話は、他愛のない世間話のやり取りではあるが、男女の仲をとりもつ「仲人」や名付け親となる売薬人もいた。1,000 人の「仲人」を務めた人や、字画数や漢字の成り立ち、生まれた年月日などを細かく考慮して名づけた子ども 10,000 人という人もいる。

また、ひと昔前には、農家の家々では代金の代わりに米や野菜との物々交換であった時代もあり、行きよりも帰りの方が荷物が多かったという売薬人も多くいたと聞く。



写真 街並みを回る売薬人

このように、単に薬売り人と買う人という付き合いでは生じない、人と人との関係の深さも、玄関先で執り行われる売薬の中で培われた社会的関係として捉えることができる。

平成 29 年 (2017) 6 月に、本町と佐賀県の医薬品配置協議会が、利用者の異変を察知した場合、町や民生委員に知らせるという町民見守りの協定を結んだ。これも長年、各家々の人々と売薬人が培ってきた信頼関係の表れといえる。

【おまけ】

売薬人が家々を去る時、時代の流れの中で置き薬ならぬ置き土産として、様々なものが子どもたちへ手渡されていった。紙風船、独楽、その時々々の時世にあった玩具が置かれ、それを楽しみに待つ子どもたちでもあった。

置き土産を持ってくる売薬人は、子どもにとって玩具を手に入れることが稀であった昭和 30 年代以前において、貴重な遊び道具の提供者でもあった。玄関先で母親と売薬人が世間話で盛り上がる横で、売薬人から玩具をもらえるのを手持無沙汰に今か今かと待ち望む子らの姿があった。売薬人としての人柄と信用の他に、子どもたちからの人気度も売薬の商圈拡大に一役買っていた。

売薬人は、次への布石として配置売薬先の家々の人々に、「おまけ」を配っていく。その時々で、「おまけ」の内容は異なっており、箸、縫い針、紙風船、ゴム風船と家庭向けから玩具まで様々である。箸、縫い針は、家庭を取り仕切るご婦人方に、紙風船、ゴム風船は次世代を担うであろう子どもたちへ配られる。箸、縫い針は、手に入れることがやや困難であった時代には重宝された。紙風船、ゴム風船は、子どもたちへの「おまけ」として喜ばれ、売薬人が魔術師、時には「宇宙人」へと化ける芸とともに、子どもたちの中に七不思議のひとつとして立ち現れる。

玄関先で配置薬の消費状況を確認し、金銭のやり取りが終わると、子どもたちむけの興行が始まる。ゴム風船を手にした売薬人の巧妙な話術とともに、「宇宙の力を、このゴム風船に入れると、ほ～～ら不思議、リングの形になりました。」とゴム風船がいくとも簡単にリングのごとく凹みをつけて形づくられる。「おじちゃん、宇宙人やけん、でくつと(できるのだ)。」という言葉に、目を丸くしてゴム風船のリングを見つめる子どもたち。子どもたちの口々に、「なんで～っ、なんで～っ。」「宇宙人なら、なんででくつと?なんで(日本語)言葉ばしゃべると?」という疑問符が出てくる。それに対して売薬人は、「おじちゃんは、ここに来る前に、ちゃ～んと土地の言葉ば勉強してくつ(来る)と。暗かうちに来て、くろ～なって(暗くなって)、基^き山の山頂から宇宙船にのってかえ(帰る)つと。明るいうちにやったら、み～んなにみつかるけんね。」と、さももっともらしく語る語り口に、子どもたちには世の中の七不思議の一つとして受け継がれていく。このリングの形をした「ゴム風船」、子どもたちはお父さん、お母さんに作ってもらおうべくお願いするが、なかなか作れない。悩み、途方にくれるお父さん、お母さんの姿を前に、「宇宙人」を標ぼうする売薬人の宇宙人説の確からしさが子どもたちの心の中に高まっていく。



写真 おまけのゴム風船と紙風船

⑨間宿の生業・造り酒屋と市

木山口町が江戸時代の間宿であったことを物語るように、二つの造り酒屋が本町にはある。

長崎街道沿いの木山口町には、享保年間創業と伝えられる松隈酒造場があり、「三國山」を代表銘柄とし、多くの人々に親しまれた。操業を終了した現在も、街道沿いに残る主屋がかつての風情を今に伝えている。もう一つの造り酒屋は、大正8年(1919)創業で小森家住宅を主家とする基山商店酒造場である。「^き峰^{ほう}鶴^{つる}」を代表銘柄とし、現在も多くの人々に愛される酒を造り続けている。かつて、酒造りの大樽の^{おおたる}日干し風景が見られるようになると、新酒の仕込みの時期がきたことを人々に知らせていた。

町内で酒造りを継続している基山商店での酒づくりには、基山商店敷地内から湧き出る井戸水が使用され、基山から流れる伏流水であることにこだわりをもつ。さらに、酒の原料である米の一部も、基山産(本町小倉地区で作られた山田錦)を使用している。

酒造りは、まず米を精米所にて精米するところから始まる。その後、主屋背後にある仕込蔵・酒造蔵で酒造りが行われ、米の収穫が終わった10月初旬から仕込みがはじまる。酒は、タンクごとにつくられ、これが各銘柄となる。一つのタンクでの仕込みが終わると次のタンクへの仕込みといったように継続的に行われ、最も早い酒は年内に完成し、新酒として出荷される。精米所の建物の中では、現在各銘柄のラベルを貼る作業が昔ながらの手作業で行われ、一本一本丁寧^{けんぶん}に作られている。毎年2月には、新酒の出来をみる新酒会が昭和50年(1975)から開催され、出来を見分する人々は、新酒会へ参加するお礼の菓子折りを造り酒屋へ包み、基山商店は新酒の出来を見てもらう緊張の中で、人々の反応に新酒の出来不出来を確認する。そこには、地域の酒としての味を守る造り酒屋の気概と、それを守り育てる人々の厳しくも温かい関係を見ることができる。



資料 酒樽の日干し風景 (昭和20年)



写真 仕込蔵



写真 ラベル張りの作業



写真 酒造風景

このように地元に着した酒造りへの姿勢は、代表銘柄である「基峰鶴」の名称の由来が、基山^{きざん}の山塊を悠然と舞う鶴の優美な姿から付けられたことに見ることができる。基山商店の酒は、木山口町内の居酒屋に常備され、町民はもとより来訪者の疲れを癒す酒として、間宿としての風情を現在も保ち続けるとともに、町内の神事の多くに「基峰鶴」がお神酒として奉納されている。



写真 住吉神社に奉納される「基峰鶴」



写真 隼鷹天神社直会「基峰鶴」

長崎街道の間宿として栄えた木山口町は、長崎街道の往来だけでなく近隣の町から博多 - 熊本方面への物流路として生かされ、多くの人々が集う。昭和期からは毎年 12 月には「きやまの市」が開催され、隣接する鳥栖、小郡からも商品や出店の品を求めて多くの人々が集い、年末の風物詩として賑わうとともに、子どもたちの楽しい娯楽の場を提供していた。その「きやまの市」は、長崎街道沿いに出店され、時にはサーカスや見世物小屋、映画館等も開かれ、多くの人々が集い遊べる空間として年末の風物詩として知られていた。現在は、小規模ながら舞台を JR 基山駅前の商店街に移し、当時の名残を感じさせている。



資料 木山口大安売り風景 昭和 25 年 (1950)

④若宮八幡神社の十日恵比須祭

【しめ縄打ち】

毎年 12 月初旬、若宮八幡神社拝殿西側、宝暦 4 年 (1754) 建築の観音堂の前の広場を舞台に、3 区、8 区など関係する氏子たちによってしめ縄の素であるさしわらづくりが進められる。さしわらが多量に出来上がると、拝殿南西に育つ大楠の枝をしめ縄掛けに利用し、「エ〜サ、ヨイ、ヨイ、ヨイ、ヨイ」の掛け声とともにしめ縄が打たれていく。しめ縄打ちは、若宮八幡宮の年末の風物詩となっている。氏子たちによって打たれたしめ縄は、長崎街道沿いの明和 4 年 (1767) 寄進の鳥居、拝殿、そして十日恵比須の主役である恵比須神を祀る石製神殿の前に掛けられる。

【十日恵比須祭】

この祭りについては、昭和 28 年（1953）の基山町商工会資料に「十日恵比須祭」との記載があることから、少なくともこれ以前より行われていたことがうかがえる。

毎年1月10日の午前5時より境内で薪を焚き、神事が執り行われ、参詣者にはお神酒、スルメ、昆布が振る舞われる。現在は、午前6時30分に神事が執り行われ、午前7時から参詣者を迎え入れる。

恵比須祭の特徴として、由来は不明ながら、恵比須さんより小銭程度のお金を借用する行為が行われ、翌年の1月10日に倍返しを条件に、貸出帳簿に住所、氏名、電話番号、借り入れた金額を記入し借用する。約束不履行の場合は、氏子の中から取立人が借用者宅まで出向き返済を求めることもある。このお金はすぐに使った方がご利益があるとい伝えられている。

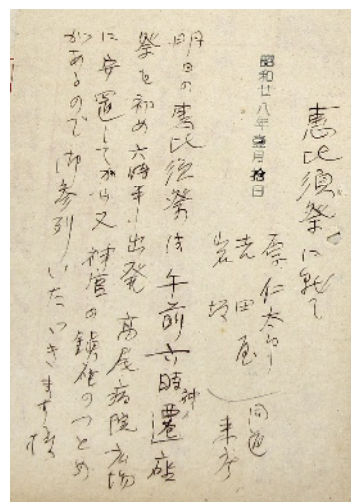


写真 十日恵比須祭に関する基山町商工会資料（昭和 28 年（1953））



写真 十日恵比須祭時の神殿と大楠



写真 恵比須神社石製神殿



写真 十日恵比須祭の神事の様子



写真 恵比須さんからの借用帳簿



図 若宮八幡宮氏子居住地

(3) おわりに

本町は、古くから古代官道や長崎街道といった福岡平野と筑紫平野を結ぶ幹線ルート上に位置する交通要衝の地であった。また、肥前国の東端にある筑前国・筑後国との国境の地であるとともに江戸時代を通して対馬藩領として治められるという、周辺地域とは異なる歴史の中で特徴のある文化が育まれてきた。その名残として長崎街道沿いには、筑紫野市との境界に二国境石、白坂集落や木山口町には田代売薬に関する天本家住宅・西海製薬社屋、さらには造酒屋や若宮八幡神社などの建造物が往時の人・物の交流を物語っている。そして、これらの建造物群を舞台として、今も続く人々の営みや祭事といった活動が木山口町の歴史的風致を形成している。

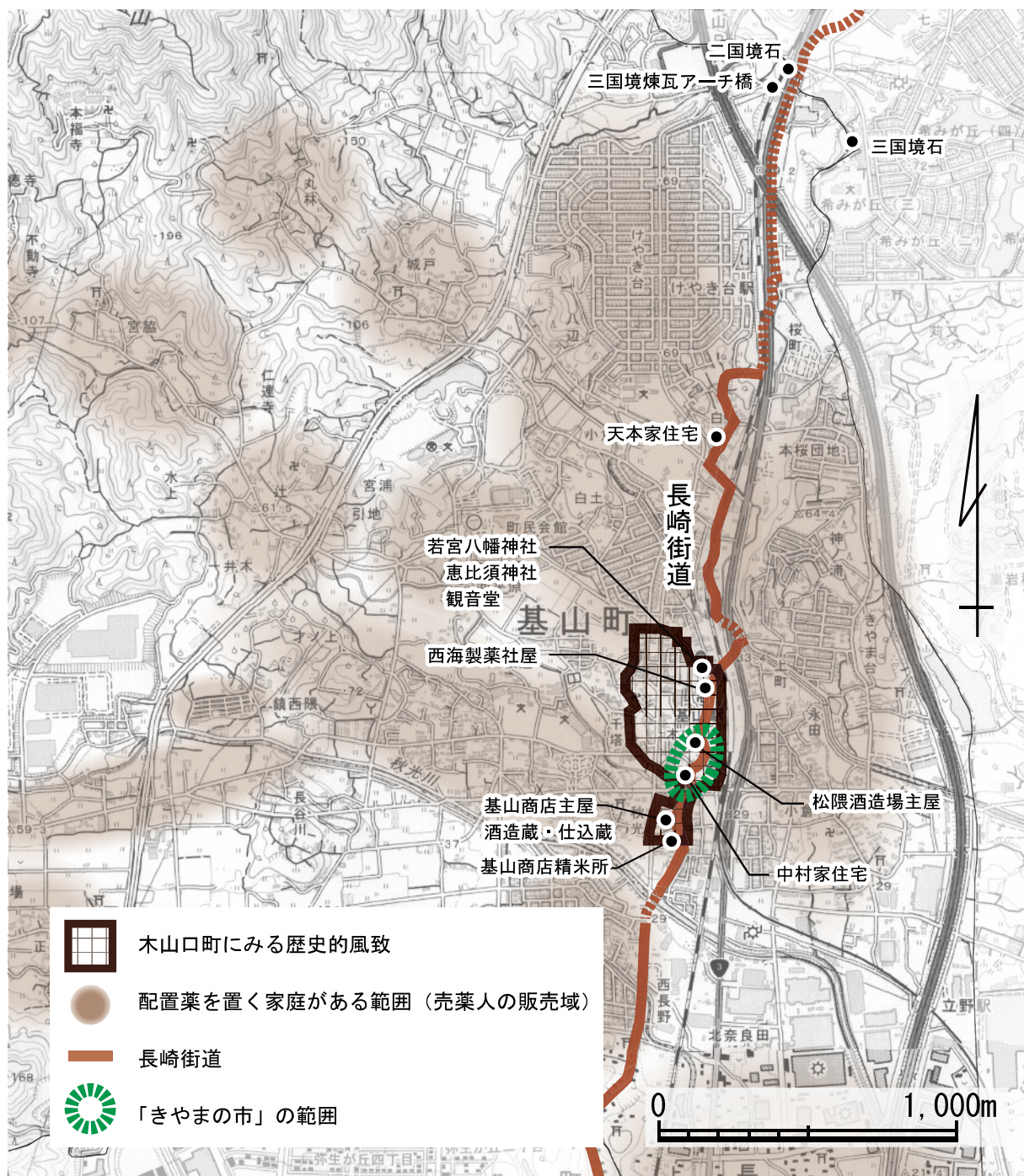


図 木山口町にみる歴史的風致